

短歌

栖神居詠草

福島義孝

亡父一周忌

嵐後のひどく荒れにし亡父の墓吾子らとともに掃き淨めたり  
今宵もつひに電燈のつかぬ亡父の家に燭をともして語り更かしぬ

血盟團判決の日

慎重審議八十一回の公判に不服ぞなけむ裁かるゝ士も  
奥利根の静けき村に老翁は今日も藥を煎つゝあらむか(盟主日召の父を想ふ)

除夜

風害をこもごも言ひつ小作料の五割を割かせて入らかへりぬ  
支拂はとどこほりなく濟ましたり静かに除夜の鐘鳴り出でぬ  
除夜の鐘聴きつゝひとり泣む酒のこのよき味は久しぶりなり  
夜をつぎて兒らの晴衣を縫ひあげし吾妻ははやも寢息立てつゝ

朝日新聞社寄託風水害義金を恵與せらる

一圓五十錢の金は少けれ人々の心ありがたく頂きにけり

黎明

中村邦八

新しい日が来た、若々しい日が！

片丘に露満ちて、青芽はふつくりと膨み新緑は萌え出る、野原の黒土は若芽を吹き出し、愛の小鳥は新しい巢を造るに忙しい、揚げ雲雀名のり出で、蝸牛は枝に這ひ、可弱い新しき翼をもつた雛達は空中に舞上る日待つ、新しい日が来た、黎明の日が、紫雲變遷として、天人は鼓を撃つて！さうだ！一切衆生が救はれる日が来たのだ、大聖の降誕だ、佛陀の出御だ。天からは蓮華の花片が繽紛として地上にふりそゞぎ、日の光は一際明かに、地面よりは滾々と美しい泉が涌出で、藍毘尼園の上には五色の雲たなびき、妙なる音楽は虚室より聞え、馥郁たる百花は一時に咲き亂れ、悪人は善人と變り、盲目は見え、病者は癒、濁いた井戸は清水が湧き出で、此の日は總ての束縛を離れて、慈悲と高潔のみが榮譽を荷ふ光明の世界、そして佛陀の慈悲開發の潮は我

この金の使ひ途をば吾が妻と思ひ迷ふを人嗤はざらむ  
食卓の貧しさを言ふ長男に凶作地の話語り聞かせぬ

早 春

穂すすきの大野の上にひろがれる二月の空を雲のわたらふ  
兒を連れて川原に來れば猫柳ふふめる土手にあをじ啼きをり  
猫柳たばねてやれば小さき手に持ちあぐむ兒の面の明るさ  
しるがねのやは芽にふれてほほ笑まふ兒の手をとればつめたかりけり

日露大戦回顧三十年

若かりし父が征衣のふところに懐きしめけむこの古き寫眞  
砲音の絶えたる時を塹壕に父は見にけむこの古き寫眞  
眠られぬ夜毎なりしを思ひ出でて語らふ母は老いたまひけり  
背負はれて凱旋の父を迎へたる五歳の吾れを想ひゑがくも  
山々をうちどよもせる萬歳のこゑは幼き覺えに残れり  
ほろ酔ひの夕餉の卓に戦場の物語せし亡父の眼に見ゆ  
大帝より賜はりし亡父の勳章を吾子らの胸に佩けてやりたり  
ひるがへる國旗のもとに吾子みたり胸を張りつゝ列びたりけり

親戚某は二〇三高地にて

貫通銃瘡を負ひし人なり

ダムダムの弾丸貫ける瘡口の排膿やます三十年生く  
不思議なる生命の力は膿汁にまみれながらも生きつげるなり  
なが病みの骨ばかりなる身を起し老癯兵は膿をとらせり  
己が身に迫れる死さへ平然と語るにわれの言ふすべはなし

等佛性の岸邊に高く渴卷いた五十年の御教  
化も、沙羅雙樹生者必滅の悲しみに合ひ、  
非滅現滅の滅を示された。

而して時移り、月變り解脫堅固、禪定堅固  
多聞堅固、塔寺堅固と二千年は去りて、白  
法隱沒、闍諱言訟、五濁惡世、末法澆季の  
常闇に佛滅後二千七百七十一年貞應元年壬午  
の朝まだき、安房の小湊のとあるさゝやかな  
な賤が伏屋の呱呱の聲、そは本佛と本法が  
末法嚙味の衆生を覺醒せねば人生は徒らに  
勞費されるのみである。愛取に捕縛された  
衆生は限りなき輪廻の徒勞をなめてゐる。  
その日佛陀は本化上行を後五百歲始に出現  
せしめた……

そして天徳元年時鳥みだれなく五月十二日  
御年十二歳にして清澄山に登り、黒髮切つ  
た善日麿は嶄然頭角を見し學識群に秀で、  
學業日に進み、月に將み、曆仁元年千草にす  
だく虫がほろ／＼と鳴く頃住み馴れた清澄  
の山を下り、星月夜鐵倉に笈を負ふてより  
比叡、南都、京の都と一代聖教を研讀する  
事十二星霜、螢雪の功を積み、遂に學なり  
八萬四千藏の瀛奥と慈悲の奥藏を究め、佛

春日病臥

高熱に五体は痛みうづくなり堪へつつあれば汗流れくる  
 節々の痛みをじつとこらへつつ外の面を見れば陽光流るる  
 時の間を四肢の痛みは鎮みをりたまゆらきこゆうぐひすの聲  
 雨の日はわが枕べを子どもらの騒ぎまはれど叱りもならず  
 おのおの賞頂きてかへり来る吾子を門邊に妻は待ちつつ  
 玻璃窓に顔よせて見れば音もなく小雨は今朝も降りつづきをり  
 庭隅に叢立ち生ふる山吹の新芽明るく晝をふる雨  
 はつはつに芽ぶき初めたる庭木々の梢ましるく雪は積りぬ

暮春抄

若きわれに酒愼しめとうかららがこも言ふはうべなはんとす  
 うからの言葉聴きつつ中風の多かりし吾が血筋を思ひぬ  
 久々に庭を歩めば何時來しか土藏の梁につばめ啼きをり  
 をとめ子の性はかなしも教へねど摘み來し花は佛にまいらす  
 山柿にわづか七首の歌を遺し生きむと言ひしが小玉は逝きけり  
 マント着てさむげにかへる信吉に休校をすすめしが別れとなりけり  
 桑の芽は青みわたりぬ望みうすき繭値言ひつつも人ら忙しげ  
 薬瓶提げて出で來し池の邊にひそまり咲けり白藤の花  
 十つぶほど實を結びたり櫻桃の色づく日をば兒らは待ちつつ  
 春あらはしく吹くに戸に出でて櫻桃の木に支へしにけり  
 春の露は日々に育たむ隣家のぐみの青實もふくらみにけり

田園雜詠

陀の思召を塔中に於て別付された、そして思ひ出深き修學の栖たる比叡の山を後に折からの花吹雪に送られて、春風一路故郷の安房清澄に志した。一千餘尺の清澄山は古老の松柏は鬱蒼として千古の翠を浮べて渺茫たる太平洋を眼下に、金波銀波が寄せては返す磯の海邊、時は建長五年四月二十八日日光山頂旭ヶ森の巖頭に於て朝霧晴れゆく東雲の空、紫紺の海面に幽に金粉をまいたと見る時、金色の日輪が水平線上にその一角を示した刹那梵音即ちかに末法正行の題目は遙か彼方の旭日にとけ込んだ、お、黎明だ！ 能く衆生の闇を滅すべき大燈明が、元品の無明を斷ち切るべき大利劍が、此れぞ本化の大七人類救済の第一聲なれ。

題目は新しい力であり、新しき生命であり、新しき光明である。そして此の大良藥を失本心の嬰子の口に入れんと勵む慈悲は今日まで及んだ。然るに我國に於て明治維新より、文化は急速なる進歩を遂げ、然もその文化は物質に於て著しかつた。僅か半世期に於て世界文明國と伍を合せるに至つた、然し余りにも重要視された物質文化は

しげり葉の葉かけに熟るる櫻桃をとめつつ小鳥は今日も来てをり

ガラス器に盛り上げられし紅玉の櫻桃の實は食ぶるに惜しき

山形の櫻の朱實多がきたる子規の歌集の扉はしたし

病寐に櫻の朱實多がきつつ子規はその間は身を忘れけむ

己が吐く真白き絲のうす絹の中に働く蠶を見つつ居り

望み薄き繭値言ひしが蠶飼ひする人らこの頃きほへるに似つ

桑の實の熟れし畠に遊びつつ子らの口べはみなよごれをり

### 迎 火

夏草の花とりどりに咲き満てる亡父の墓べに燈籠をつる

迎火のあかりの中につつましくお盆の話を兒らは聴きをり

ほぼづきの真青き莢を一つ一つおさへつつ娘は微笑みてをり

晝顔の花咲く野路の叢に幼きとんぼ放ちやりたり

風渡る葡萄の棚に青房のゆるるを見つつ汗をぬぐふも

つぎつぎに色づく頃を背戸畑のトマトは兒らにむしらるるなり

### 母 病 む

病みこやる母の寐べに坐りゐて野球放送に耳かたむけぬ

接戦十二合唯一点をあらそへる選手の意氣は身に迫りくる

瘦せにける母のみ脚をさすりつつ歌念へどもまとまりかねつ

## 吾が葡萄郷

明治十三年秋、明治大帝山梨縣御巡幸の砌、風駕は  
吾が葡萄郷を御通過遊ばし給へり

早くも行つまれる日本、非常時の日本と云はしむるに至つた。又翻つて、近々の世界の趨勢を右顧左眄した時十九世紀後半の實證主義、經驗主義の勃興は宗教をして古代に於ける科學の代理者たるの暴言をはかした。然し我々はもう科學の世界と稱する唯物的な盲目の世界のみは飽きた。今や物質的世界は自ら崩壞の序曲を奏つ、ある—世界はスツカリ疲れた、慈悲の新しい生命たる南無妙法蓮華經の外に困憊せる機械の世界は復活の道を失つた、そして洋の東西を通じて、一つの世界としての鬪諍堅固をあらゆる方面に實現せる事は、世界青史上過去に於て果してあつたらうか、今は愈々末法の正味に入つたのだ。そして混沌たる思想界の指導原理たる宗教界に於ては指方立相の淨土宗は、その淨土を否定して現實世界の淨土建立の誓願とまで云ひ、超越宗教のキリスト教すらも、社會的進化的な神を唱へやうとしてゐるではないか、時は白法隱没を正直に物語つて居る、世尊の金口、塔中別付の要法を宣揚の時は來れり。一箇浮題第一の大鬪諍の世界の序幕はや

御 製

えびかつら色づき初めぬ山梨の里の秋風寒くなるらし

笹子路を御幸の鳳駕肅々と越え給ひけむ昔おもほゆ

えびかつら實れる里の秋風をあはれとおぼし御製ましけむ

山畑に色づき初めしえびかつら鳳駕とどめてみそなはしけむ  
山峽のいぶせき里も大君の御製に生くるかしこさを思ふ

國 分 寺 詠

竹やぶの繁みの中に廻廊の大き礎石は据ゑられしまま

どくだみの花ほのかなる藪かげに大き礎石は苔むしてをり

この國に蔓敷き並み建たしけるみ寺の結構はゆかりけむ

畑中の古井の跡は水涸れて草がくりなり幾世經にけむ

掘りかへす人はふりどの地の底ゆ全き瓦を見出でたりとぞ

墓原の雑草中にころがれる布目瓦のかから拾ひぬ

亡 父 三 周 忌

亡き父を慰めむとて秋草を植ゑにし妹も母となりぬる

いくとせを屍の如く在り經たる亡父を憶へば堪へがたきかも

ものいへぬ父なりしかどうつし世におはせし時は勵まされけり

ふるさとの加賀の山河を再びは見せ申さざりし悔新たなる

今はただひとりとなれる老い母をいかにともして慰めまをさむ

がて此れ一天四海皆歸妙法の前奏曲なのだ  
輕佻浮華に流れつゝある思想界は、恰も荒  
狂ふ果しなき焼ついた沙漠に針路を失ひし  
隊商は餓と渴と休息を癒すべく、沃地を希  
求しさまよつてゐる。此の頻死の隊商の一  
縷の光明は妙法の沃地あるのみ、今や混沌  
の思想界に日蓮主義が爆發する、此の爆發  
に大旋風は捲き起る、雲は閃く、あゝ私は  
信ずる、眞に立正安國の大スローガンを打  
立て、警鐘を亂打すべきの好機であると、  
赤き血潮の青年僧侶諸兄よ、新しき日が近  
づいたのだ、新しい日が！ 然もその新し  
い日は我等若き本化の學徒の双肩にいつか  
り擔ひられて……。

あゝ東雲は白みたり、鯨音は曙を告る、  
本化の寢音は富士の彼方に聞へる、待ちあ  
ぐんだ、第三の黎明は我々に歩一歩近づき  
つつある、物質文明をまとして三千大千  
世界の大神藍に三寶を崇拜する日が……。